秋團扇　議論とて秋の團扇を手の力

案山子　兀然ときりかぎ畑の案山子かな

血に染むやいくさのあとの案山子

向きあふて何を二つの案山子かな

笠落ちて案山子仰むく姿あり

三井寺女詣　名月に白粉くさき伽藍かな

木賊川　子を負ふて木賊刈る里の女かな

鹿笛　鹿笛の谷をへだつる月夜かな

後彼岸　秋はまた春の残りの三阿彌陀

秋晴れて彼岸の乞食膝寒し

渋柿の青くて落つる彼岸かな

踏まれたが損か彼岸の蕎麦畠

うまさうに見れば彼岸の焼茄子

富士は曇り筑波は秋の彼岸かな

新酒

新酒賣る家ハ小菊の莟こぼれ

天長節

日の旗の杉葉に並ぶ新酒かな

~~濁酒~~

~~三日月のうつらで寒し濁酒~~

砧

砧打てゑばはら〳〵と星のこぼれけな

狼や梺にひくき小夜砧

舩かけて明石の砧聞く夜かな

柚味噌

鯛もなし柚味噌淋しき膳の上

崩簗

雨ほら〳〵小橋落ちて簗崩れたり

菊酒

天長節

たまはるや大盃の菊の酒

稲妻

稲妻に金屏たゝむ夕かな

稲妻や高燈籠にふりかゝる

~~稲妻や石にあたつて折れ返る~~

~~稲妻や敵艦遠く[illegible]~~

稲妻に見ゆるかとぞ思ふ海の底

天の川

~~船寐て故[illegible]夢や天の川~~
天の川野牛の角にかゝりけり
○天の川敵陣下に見ゆる火
ところどころ野営張るなり天の川
天の川落ちて消えけり海の果

三日月

烏寐て木の間に細し三日の月
大波を打ちかぶせけり三日の月

名月

大木の低き枝なし三日の月
夕焼やきらりきらりと三日の月
猪牙舟の忽ち遠し三日の月
波のほの三日月消ゆる嵐かな
名月のこよひに迫る曇り哉
名月やうかれ出でたる捨小舟
名月や海遠く舟空に在り
名月や小便すべき隈もなし
名月や藪の中行く人の影
名月や廻りて見する風車

ガラス使用

名月や人うづくまる石の上
名月やわれらどぶろく五合あり
名月や大佛の影山の如し
名月や白き鳥飛ぶ海乃上
名月の波に浮ぶや大八洲
名月の大きく出たり海の上
大名のひとり月見る夜中かな
雲一つこよひの空の大事なり
今日の月きのふの月となかめけり
~~今の月標が十に餅を搗~~

いろ〳〵に坐り直す舟の月見かな
野営
万人の額あつむる月見哉
兵士
あす知らぬ身を韓國の月見哉
公卿
随身の走りついたる月見かな
僧
月見るやきのふの花に出家して
樵

国立国会図書館　タイトル『寒山落木 : 1-5』 請求記号 WB12-19　ガラス使用

~~薪賣て[illegible]か一人今宵の月~~

馬士

馬追ふて芋畑帰る月見哉

棹郎

名月の汐に流され湊路まで

盆の月

穢多村や犬の皮剥く盆の月

十六夜

それ丸や十六宵の闇を飛びめぐる

~~又晴れて十六夜をあぐまれけ物~~

後の月

~~酒盛に山人居ならぶ夜や十三夜~~

征外の兵士を懐ふ

韓み見よ日本を出づる今日の月

月

大海原月真丸に浮ひけり

聾のひとり月にぞ向ひける

杉暗し月にこぼる井戸の水

~~山峡や月恋し山の山めぐり~~

城跡や月に黒きは何の糞

祇王寺の月に何泣く経罷めて

ガラス使用

犬吠えて月傾きぬ天王寺

橋に倚れば月に流るゝ舟一つ

星もなし月は長月十四日

野に山に進むや月の三万騎

進めゝゝ角一聲月上りけり

月千里馬上に小手をかざしけり

月更けて東坡の舟の流れ去り

~~月の舟[illegible]山の[illegible]に上る~~

月や今かゝれり松の葉三枚

薄月も更けぬ御格子参らせよ

夕月をうしろに入れて杉の森

から駕の岨道戻る月夜かな

犬吠えて上野の森乃月もなし

海更けて九日頃の月夜かな

~~月[illegible]樹に在り下[illegible]水の音~~

鳴雪不折両氏をつれゆきて

一行に画かきもまじる月夜かな

御院田にて鳴雪不折両氏に別る

月の根岸闇の谷中や別れ道

戦捷

砲やんで月朧ー　山乃上

芋阪に名物の團子あり

芋阪ゝ團子ゝ月乃ゆかりかな

海戦

舩沈みてあと波月を砕くかな

## 秋風

秋風や傾城町の畫下り

秋風や天竺牡丹花細し

秋風や紫薄き燕子花

秋風や森を出でゝ川横ハる

秋嵐
野分

秋風や薔薇の花びらちりとまらず

秋風や大蛇野道に横ハる

秋風や雲吹きわたる出羽の海

秋風の上野の出茶屋人もなし

何とせん毋痩せたまふ秋の風

藪川や緑青浮む秋の風

地蔵古りて錫杖折れぬ秋の風

墓原の提灯白し　秋乃風

莚帆や吹き破られて秋の風

~~金棒の板塀 [illegible] 秋乃風~~

此頃や河豚小さき秋の風

染物のちゞみにありぬ秋乃風

骨か原

仕置場や地蔵の胴の秋の風

黄海の戦に捷ちて

~~秋風の渤海湾に船もなし~~

勝戦

秋風乃韓山敵の影もなし

## 初嵐

初嵐鵲乃橋崩れけり

## 野分

すさましや野分の塔のきしる音

電燈や夜の野分の砂はしり

野分して孔雀の羽の細りかな

人細し野分の朝の大伽藍

石積んで野分に向ふ車かな

野分すなり赤きもの空をしるかな

三井寺の釣鐘うなる野分かな

押しつけし大竹原の野分かな

大道の人吹きちらす野分かな

ガラス使用

大石の山道ふさぐ野分かな

~~木嶋門野分のあとの静かなり~~

# 霧

霧晴れて大旗小旗翻る

足もとや霧晴れて京の町見ゆる

霧晴れて山ハ十歩の内にあり

廻廊や霧吹きめぐる嚴嶋

ともし火や霧に並びし村百戸

朝霧やもつれてめぐる塔の尖

霧深き足柄山の荷流車小

霧雨やはつきり明くる辻行燈

安房の海や霧に灯ともす漁舩

朝霧や旗翻す三万騎

盆の如き朝日のぼりぬ霧の中

川崎

朝霧の雫するなり大師堂

川崎大師堂山門を新築す

くさび打つ音の高さよ霧の中

瀧川

茶屋あらはに灯火立つや霧の中

# 露

白露や野営の枕木ぎれし
白露の三河嶋村灯ちら〳〵
大佛の顔をはしるや露の玉
~~誰が家と名に跡ある朝の露~~
松明を捨つるや露の煮ゆる音
大木や露の細道橋朽ちたり
（無花果の）幅廣き葉を流れけり朝の露
木立暗く堀割濡れて露の音
雨晴れて朝日の露のこぼるゝ
白露に眼の玉光る佛かな
いたいけに小草露持つ夜明哉

從軍の人を送る
生きて帰れ露の命と言ひながら

恋
紅皿も露けき頃の泪かな

送別
草鞋をいて木曽路の露につまつくな

# 露時雨

からげたる赤腰巻や露時雨

秋時雨　秋もはや日和しぐるゝ飯時分　碧○

秋雨　老僧の八百屋尋ぬる秋の雨

大木の中を人行く秋の雨

~~秋の雨月にも[illegible]夜の嵐哉~~

掃溜に鴉鳴くなり秋の雨

紫陽花や青たまりし秋乃雨　○

秋空　秋の空物干竿の高さかな

秋雲　低く迷ふ廣野の果の秋の雲

秋の雲鳴門の空を渡りけり

星月夜　押しあふてこぼるゝ空や星月夜

禪寺の門を出づれバ星月夜　○

此頃や樫の梢の星月夜

笠一重外は渺々として星月夜

秋天文雜　露の須磨霧の明石のともしかな

ガラス使用

**初汐**

~~初汐や太平洋を檣乃下~~
~~初汐やどゞつくにはいる軍船~~

**花野**

山の上にさては湖あり花野あり
神の子の地に低く飛ぶ花野かな

**秋山**

雲むら〳〵秋の山高くあらはる
秋の山王子の上に見ゆるかな
信濃路やどこ迄つゞく秋の山
追分や左に遠き秋乃山

**秋水**

松さびて緋鯉も居らず秋の水
古井戸や金魚ものくふ秋の水

**秋川**

蛭瘦せぬ秋の野川の水清み

**秋海**

つら〳〵と船ならびけり秋の海

## 落水

小山田や一間程の落し水

## 刈田

刈田から何驚いて鳩四五羽

雞乃籠をはなれて刈田哉

## 穭田

○穭田や瘦せて慈姑の花一つ

碧

○

## 鴫

古沼や鴫立て三日の月低し

立てバ淋し立たねバ淋し沢の鴫

立てど鴫立たねど秋の夕かな

○

## 鶉

末枯に晝の鶉乃あはれなり

鶉鳴いて提灯草に隠れ行く

## 鶺鴒

鶺鴒や水瘦せて石あらはるゝ

碧

○

~~鶺鴒や叩き折つたる石の橋~~

鶺鴒や瀧をはねたる尾の力

○

国立国会図書館　タイトル『寒山落木 : 1-5』 請求記号 WB12-19　ガラス使用

藪川や鶺鴒とまるごみ乃上

雁

厂かねの家鴨にまじるあはれし

厂かねの腹に月さす夕かな

書に倦みて饅頭焼けば雁の聲

~~本ぜ見るまでやいれば雁乃聲~~

（黄海の戦）

船焼けて夕榮の雁乱れけり

渡鳥

草臥や我足遅き渡り鳥

船の灯を目當に闇の渡り鳥

（海戦）

渡りかけて鳥さわぐ海の響きかな

色鳥

色鳥や頬の白きは頬白か

（動物園）

鳥はらくどれが頬赤やら目白やら

鵙

氣短かに鵙啼き立つる日和かな

稲刈れと鵙の促す日和かな

ガラス使用

○鵙鳴くや十日の雨の晴際を　碧　○

○鵙鳴くや薮のうしろの蕎麦畠　碧　○

啼きながら鵙の尾をふる日和かな

○鵙鳴くや晩稲掛けたる大師道　碧　○

郊外散歩

○鵙鳴て妙義赤城の日和かな　碧

**四十雀**

はらはらと飛ぶや紅葉の四十雀

**鵯**

○鵯や晝の朝顔花細し　○

**啄木鳥**

啄木鳥や山しんとして晝の月

**燕帰**

燕の帰りて淋し電信機

**稲雀**

○稲雀稲を追はれて唐黍へ　碧　○

嬉しさうに忙がしさうに稲雀

**鹿**

闇の鹿石につまづく聲すなり

石壇に鹿鳴く奈良の月夜かな

人去て鹿鳴く山の湯壷かな

大杉の下に鹿立つ一つかな

捨舟や鹿の寐に来る薄月夜

上野動物園

梦に見て何處の秋を啼く鹿ぞ

沙魚　引汐や沙魚釣り繞る阜頭の先

落鮎　落鮎の身をまかせたる流れかな

鰯

相州

鰯ぶつ上様日和暮れんとす

河鹿　河鹿鳴いて石ころ多き小川哉

蜩　蜩の茶屋静かなり杉の中

~~蜩や動物園の垣の外~~

奥の院見えて蜩十八町

秋蟬　秋の蟬子にとらるともあわれ

此頃はまばらになりぬ秋の蟬

国立国会図書館　タイトル『寒山落木 : 1-5』 請求記号 WB12-19　ガラス使用

秋蠅

馬糞をはなれて石に秋の蠅

秋もはや蝨なぶるべき蠅もなし

~~秋蝶~~

~~秋の蝶物喰いで何を生きて居る~~

秋蚊

秋の蚊とあなどれバ群れて我をさす

蜻蜓

兀山にそふて夕日の蜻蜓かな

噴水につどえて遊ぶ蜻蜓かな

石橋の石に喰ひ付く蜻蜓哉

蜻蛉群る地蔵の辻の夕日哉

蜻蛉乃影せつろしや顔の上

○赤蜻蛉筑波に雲もなかりけり

蜻蛉の勢を揃ゆる夕日哉

蜻蛉の眠られもせぬ眼玉かな

堀割を四角に返す蜻蛉哉

螽

○餘所の田へ螽のうつる日和かな

蛙逃げ螽飛ぶ野の小道かな

ちらくと螽飛ぶ野の日和かな

国立国会図書館　タイトル『寒山落木 : 1-5』 請求記号 WB12-19　ガラス使用

飛びついて螽を落とす蛙かな
低く飛ぶ畦の螽や日の弱り
○刈株に螽老い行く日数かな
○稲刈りて水に飛びこむ螽かな　碧
飛びかけし螽押ゆる山風かな
我袖に来てはね返る螽かな

**螳螂**

螳螂の石を枕となりにけり

~~**蟋蟀**~~

~~[illegible]や[illegible]の椽に[illegible]~~

**蝉**

竹楊に蝉~~鳴き~~飛ぶや夕月夜
蝉や露なめて居る夜泊石

**虫**

松杉や晝の虫鳴く八重葎
虫鳴くや木もなき闇の山一つ
下宿屋の裏窗あかし虫の聲

**蚯蚓鳴**

名剣は土に埋れて蚯蚓鳴く

ガラス使用

**桐一葉**

曙や一葉浮いたる手水鉢
わくらばに残る一葉も散りにけり

**木槿**

花木槿西日さしこむ簀子かな
○木槿咲て里の社の普請かな　碧
木槿咲く垣や小道の楷　子貢
木槿咲く何ぞと見れバ野雪隠
木槿垣箕輪の里の境かな
木槿垣箕輪をめぐる小川かな
木槿咲いて船出来上る漁村かな
○木槿垣人も通らぬ小道かな
杉垣に結ひこまれたる木槿かな
寺町の片側淋し木槿垣

**木犀**

木犀や朱欄高し丫鬟月に立つ
木犀や雨の欄干人もなし

**柳散**

古庭の柳散りけり手水鉢

国立国会図書館　タイトル『寒山落木 : 1-5』 請求記号 WB12-19　ガラス使用

根岸音無川
○柳散り菜屑流るゝ小川かな　碧○

芙蓉

枝廣くたしかに開く芙蓉かな
古家や芙蓉咲いて人なまめかし　○

紅葉

○松杉や朱の囲垣の薄紅葉
○一葉二葉若木の楓初紅葉
一もとは墓場の中乃薄紅葉
塔見ゆや小山つゞきのむら紅葉
つれぶしや女商人山紅葉
杉の奥に白雲起る紅葉かな
~~大帆小帆向ふの紅葉かな~~
水青く石白く両岸の紅葉かな
~~家まず[illegible]帰る道の紅葉かな~~
紅葉見や異國の王子馬で来る
家やいづこ夕山紅葉人帰る
きら〳〵と紅葉まはゆし藪の中
松紅葉中に暮るゝや大悲閣
奥深き杉の木の間の紅葉かな

国立国会図書館　タイトル『寒山落木 : 1-5』 請求記号 WB12-19　ガラス使用

紅葉あり寺も社も岡の上

飛鳥山

目の下や杉まぜ紅葉の十箇村

本門寺

見上ぐれバ石壇高し夕紅葉

~~池上松葉館~~

~~杉木立中に紅葉の家居かな~~

蒲田眺望

山に倚つて家まばらなりむら紅葉

仁王画賛

手も足も顔も野寺の紅葉かな

銀杏黄葉

杉暗く中に色つく銀杏かな

野山の錦

たゝかひのあとを野山の錦かな

枸杞花

裏道やたこん花咲く小笹垣 ~~碧~~

柿

渋柿や落ちて蹈まるゝ石の上

渋柿の鳥もつゝかぬあはれなり

無花果

臍寒し板喰ふ宿の旅枕

無花果十八百屋の裏にまだ青し

無花果や桶屋か門の月細し

根岸

黒板塀無花果葉多き小道かな

團栗

團栗の音いかめしや卵塔場

○團栗の廣葉つきぬく音すなり

上根岸八十二番地内の家に移りし秋（三句）

團栗の音めづらしや板庇

暁の團栗たまる戸口かな

團栗や屋根をころげて手水鉢

栗

雨の日や泥に突きさす栗のいが

焼栗や妻なき宿の角力取

椎実

椎の実も淋しきものよ祢宜の顔

蜜柑

○根府川や石切る山の青蜜柑

綿弓や店にならべし青蜜柑

## 木實

○鳥啼いて笠にこぼるゝ何の實ぞ

鳥啼いて赤き木の實をこぼしけり　碧　○

御院殿阪ハ木實乞食此頃見えずなりぬ

御手洗にこぼれて[illegible]赤き木の実の丸

木立暗く何の実落つる水の音

~~木逃る木の實の音や板庇~~

## 木實雜

追分や雞飼ふ茶屋の柘石榴

## 朝顔

~~朝顔や野茶屋の垣根よずとし~~

朝顔や実勝になりて花細し

朝顔の石に這ひつく山家哉

朝顔や入谷あたりの只の家

朝顔や塵紙を漉く一つ家

朝顔や明石のた城須磨の船

~~苧をうむや蕣の花まばらなる~~

二三輪蕣咲くや竹格子

人もなし蕣の垣根蔦の壁

~~何も彼も庭ハ蕣だらけなり~~

国立国会図書館　タイトル『寒山落木 : 1-5』 請求記号 WB12-19　ガラス使用

曲り〱突きあたる家の葎ぞ

~~例ならず疾く起きいで散歩して家に帰し~~

~~朝顔や我いまだ起きずと思ひけん~~

根岸

朝顔の這ひいでゝ咲きぬ塀の蔦

草庵の囲いあるとある限り葎はひつかせて朝な〱楽みしにある日家主なる人の使して杉垣枯れなんとて尽く之を引ぬかせたる誠に悲しく浮世のさまなりける

# 萩

○朝顔の引き捨てられし茎かな ○

~~貸家札上蕣の[illegible]と申すゞや~~

大庭に乱れぬ萩のまがきかな

~~こぼしてや萩の枝折戸誰が住居~~

裾山や萩吹く中の尼一人

地に引くや雀のすがる萩の花

~~古塚や何を乱せし萩の花~~

萩散るや筧の下の水溜り

碧

~~萩の花垣とや申さば垣な[illegible]~~

~~人や待つ萩の枝折戸明けなれ、~~

## 女郎花

○小法師に心ゆるすな女郎花 ○

~~何戀ひて渡すか小野の女郎花~~

此邊を通ふ流車あり女郎花

## 薄

~~きぬ／＼の薄の小道君招く~~

~~舟や行く水棹動く花芒~~

武藏野や畠の隅の花芒 ○

~~一度ハ通ひし流車カ花芒~~

麓より風吹き起る薄かな

一つ家を埋めて風の薄かな

何草となしく生ふる中の尾花かな

王子權現祭

祭見に狐も尾花かざし來よ

谷川や岸ハ夕日の尾花散る

池上松葉館

海見えて尾花が末の白帆かな

大石を抱えてなびく尾花かな

## 刈萱

刈萱の乱る思ひをまがきかな

国立国会図書館　タイトル『寒山落木 : 1-5』 請求記号 WB12-19　ガラス使用

野菊

道の邊に野菊咲くなり善光寺

○稲刈りて野菊たゆたふ小道かな

屋根見れば野菊咲くなり古社

野菊咲いてまひ〳〵遊ぶ小川かな

野菊咲て測量杭の丈低し

野菊折つて足洗ふ里の女かな

大水のあとを蟹行く野菊かな

穏坊の子に折られたる野菊かな

大寺の礎残る野菊かな

草むらにもつともらしき野菊かな

碧○

曼珠沙華

陵や何と思ふて曼珠沙花

古塚や誰が細工の曼珠沙花

葉もなしに何をあわてゝ曼珠沙花

露草

露草や露の細道人もなし

蓼花

雪隠を埋めて蓼のさかりかな

畦道の曲り〳〵や蓼の花

森ぬけて川へ出づれば蓼の花

石塔を橋にかけたり蓼の花

（王子製紙場）○水赤く泡流れけり蓼乃花

碧○

ガラス使用

蘆花

~~舟歌のどこに隠れし芦の花~~

引舟や芦の葉隠れ花隠れ

砂村や芦散る暮の戻り舟

芦散るや夕日の川の捨小舟

橋高し小川を挟む蘆の花

夕風や蘆の花散る捨小舟

草花

草花や名も無き小川水清し

草花や小川にそふて王子まで

ゆ

草むらや名も知らぬ花の白き咲く

蛇塚や何とも知れぬ草の花

石垣や何を種とて草の花

垣の内に花見ゆあれハ何の草

西洋の草花赤し明屋敷

碧

古戦場

草の花人の死にしハ昔なり

鶯花園

山を負ふて草の花咲く庵かな

秋海棠

雨に痩せて秋海棠のそゞろ也

~~紅ろ秋海棠の雫かれ~~

~~露ほしも秋海棠の[illegible]~~

蘭花

蘭の香に一絃琴の音じめ哉

雞頭花

大木に並んで高し雞頭花

墓原や小草も無しに雞頭花　碧○

~~雞頭やあれたきやの北戸畠~~

~~雞頭のうしろを通る荷汽車かな~~

~~雞頭や雨のあとの塵を掃る~~

二三本雞頭咲けり墓の間

雞頭や油ぎつたる花の色

葉鶏頭

うつくしき色見えそめぬ葉雞頭　○

白粉花

妾住んで花白粉の垣根かな

檀特花

檀特や何度聞いても忘れ草

紫苑

古庭に痩せて紫苑のさかりかな

雨そぼく紫菀の花乃盛り哉

### 色菊

白菊や闇をこぼれて庭の隅
戸あくれば紙燭のごとく黄菊かな
白菊の老いて赤らむわりなさよ

### 菊

菊咲くや草の庵の大硯
菊積んで人中通る車かな
~~菊の花茎の下[illegible]見けかな~~
~~菊咲くや舟漕いで童子酒買ひに~~
~~御階近く大菊の花亂れあり~~
~~佛壇の灯暗く菊の匂ひうな~~
ものうれし小菊の花鳥の聲
縁日へ菊買ひに行く翁かな
門口や稲干すそはの菊の花
藁屋根の雫に痩する小菊かな
一つづゝ橋持つ家の菊乃花

團子阪を望みて
日曜やけふ菊による人の蟻

團子阪菊花偶

ガラス使用

あはれ氣もなくて此菊あはれなり

天長節　六句

日の旗や淋しき村の菊の垣

旗一本菊一鉢の小家かな

明家や旗はなけれど菊の花

木棉ながら善き衣着たり菊の花

菊の垣満艦飾の見ゆるかな

旗は菊は人は錦のむしろ　紅葉

川崎

菊咲くや大師の堂の普請小屋

品川

汐風に蜑か垣根の菊瘦せぬ

~~撲[illegible]~~

~~郭外を受け取る菊の垣根かな~~

東京暮秋

菊の花八百屋の店に老いにけり

信樂や茶畑の縁の菊の花といへる土朗の
句はありながら猶實景の捨て難くて
金杉の句とふり侍る

菜畠のわつかに青し菊の花

草花雑　いやが上に野菊露草かさなりぬ

芭蕉

芭蕉破れて露たゝべくもあらぬ哉
唐のうす石に並びて芭蕉かな
荒寺や芭蕉破れし猫もなし
綻びのとめどもなくて芭蕉哉
池上松葉館
廻廊の曲り〱の芭蕉哉

蔦

~~紅葉す蔦[illegible]神の杜~~
月よしられ妙義の蔦を上らうよ
引窓に蔦の手を出す山家かな
淋しさや蔦の細道捨草鞋
搦手や門朽ちて蔦うつくしき
~~古木を抱いて離[illegible]蔦か[illegible]~~
猪や迯すくゞる蔦かつら
岩橋の裏這ふ~~[illegible]~~猿や蔦かつら
軒の端や裏葉すけて蔦紅葉
岩山や空に這ひつく蔦紅葉
並松や根はむしられて蔦紅葉

国立国会図書館　タイトル『寒山落木 : 1-5』 請求記号 WB12-19　ガラス使用

蔦の葉や無絃の琴に這ひ上る

○蔦さがる岩の凹みや堂一つ　○

根岸

蔦かつら裏門多き小道かな

~~根岸や厨につゞく蔦かづら~~

一助ハ庄にたされて蔦紅葉

竹の春

碁盤あり琴なり窓の竹の春

末枯

末枯れて夕日の野邊の地藏哉

末枯のなかや稲荷の赤鳥居

末枯や人力でゆく屋敷跡

人足のしげき野邊より末枯るゝ

鬼灯

葉ハ枯れて鬼灯もゆる垣根哉

鬼灯に妹がうらゝを鳴らしける

草實

○草の實や笠がさはればほろほろと　○

線香茸

人も来ず辻堂荒れて線香茸

国立国会図書館　タイトル『寒山落木 : 1-5』 請求記号 WB12-19　ガラス使用

茸
○茸狩 山浅くいくちばかりなり 碧○
○きの香の茸（キノコ）あるでも思ふかな
茸狩の池ある山にふみ込みぬ

西瓜
○君来ずと西瓜抱えて待つ夜かな 碧○

蕎麦
花蕎麦や湖水小さく舟細し
蕎麦植ゑて人住みけるよ藪の中
○墓原のつゞきや寺の蕎麦畠 ~~碧~~

秋茄子
唐秬の囲ひハ枯れて秋茄子

黍
○黍からや雞あそぶ土間の隅 碧○
○高黍の上に短き白帆かな
白帆見ゆや黍のうしろの角田川

唐黍
（田舎）
唐黍に背中うたする湯あみかな

絲瓜
柴の戸に絲瓜の風乃静かさよ
わぐなつて残る糸瓜や屋根の上

投げ出したやうに（な糸瓜や垣の外）垣根の糸瓜ハ

家一つ門ハ糸瓜の月夜かな

菫

○朝川の菫を洗ふ流れかな　白

碧○

かいわり菜

村近し小川流るゝかいわり菜

棉

日あたりや棉も干し犬も寝る戸口

蕃椒

~~蕃がらしの色なつかしみ[illegible]す~~

稲の花

大藩のもの静かなり稲の花

牛小屋に町ハ尽きたり稲の花　○

○稲の花道灌山の日和かな

碧○

絶壁ハ蕎麦に尽きたり稲の花

稲の穂

○稲の穂や南に凌雲閣低し　○

祭礼

稲の穂の名所に神の鎮まりぬ

武蔵野の繁昌は昔の薄原に

国立国会図書館　タイトル『寒山落木 : 1-5』 請求記号 WB12-19　ガラス使用

もちおけし昔の江戸まわれし二句

稲の穂を人扱きよせ
稲の穂やあちらこちらの赤錬尾
代柯々々

稲の穂の鎌の形にたわゝける

## 稲刈

○鶴一羽稲刈るあとの夕日かな

稲刈るや焼場の煙たゝぬ日に

稲刈りや雨なからんとして山近し

○一反は刈り残す田の雀かな

晩稲刈る東海道の日和かな

○脛に立つ水田の晩稲刈る日かな　碧○

南面征北狄怨

早稲刈れた晩稲のうらむ実入尓

道灌山

見下せば（船形の）里は稲刈る日和かな

## 掛稲

稲掛けて楮短き並木かな

掛稲の上に短し塔の尖

掛稲乃とぎれに青き筑波かな

国立国会図書館　タイトル『寒山落木 : 1-5』 請求記号 WB12-19　ガラス使用

掛稲

○ 掛稲や野菊花咲く道の端
○ 掛稲に螽飛びつく夕日かな 碧○
掛稲や狐に似たる村の犬
掛稲に烏啼くなり須磨の里
背戸も見えず晩稲かけたる並木かな
掛けながら稲に隠るゝ嫁御かな

落穂

雞の親子引きあふ落穂かな

稲舟

稲舟や野菊の渚蓼の岸
稲舟に棹とり馴れぬ女かな

稲車

稲積んで車推し行く親子かな

稲こく

街道を尻に稲こく女かな
問へど答へずひとり稲こく女かな
稲こくや街道狭き藁の束
藁積んで地蔵わびしや道の端

稲

武蔵野や昔問へば稲のうなづきぬ

国立国会図書館　タイトル『寒山落木 : 1-5』 請求記号 WB12-19　ガラス使用

村遠近雨雲垂れて稲十里　○

○雨含む上野の森や稲日和

稲の波渺々として牛の聲

静かさや稲の葉末の本願寺

~~むら社壇をつゝむ稲の雲~~

**陸穂**　武藏野の薄にまじる岡穂かな　増 ~~○~~

**今年米**　こぼせしか車のあとの今年米

**秋草雑**　糸瓜肥え雞頭瘦せぬ背戸の雨　○

終りノ
# 冬

初冬
立冬
神無月

初冬の葉ハ枯れながら菊の花
淋しさハぬくさも冬のはじめ哉
冬立つや背中合せの宮と寺
女乗る宮の渡しや神無月
道はたや鳥居倒れて神無月
窗あけて見れバ舟行く神無月
十月の櫻咲くなり幼稚園
十月の畠に赤し蕎麦の茎

ガラス使用

十月のやもめになりし蚕かな
十月の鶴見つけたり田子の浦
十月や鳶舞いうつる晝の月

## 小春

~~飴賣に村の子たかる小春かな~~
摘みこんで杉垣低き小春かな
谷間や小春の家の五六軒
豌豆の生える小春の日向かな
魚見えて小春の水のぬるみけり
痩村や小春を受くる家の向
砂濱や舟の底干す小春凪
村は小春山は時雨と野の廣さ
御社壇に小春の爺が腰かけて
町はづれ小春の山の見ゆるかな

眺望

幾重にも村かさなりて小春かな

## 霜月

~~霜月の軍艦ならぶ入江かな~~
霜月やすがれ〳〵の草の花
霜月や痩せたる菊の影法師

## 霜月

霜月の小道にくさる紅葉かな
霜月や石の鳥居に鳴く鴉

## 寒

朝日さす材木河岸の寒さかな
大船の干潟にすわる寒さかな
傾城を舟へ呼ぶ夜の寒さかな
筑波嶺に顔をむけたる寒さかな
剥うし程に伸ぶ程に棕櫚の寒かな
薪舟の関宿下る寒さかな
紙燭消えて安房の灯見ゆる寒さかな
古辻に郵便箱の寒さ哉
森の上に富士見つけたる寒さ哉
~~電燈の木の間に光る寒さ哉~~
此頃の富士大きなる寒さ哉
藁屋根に鮑のからの寒さかな
花もなし柩ばかりの寒さ哉
新田に家建ちうゝる寒さ哉
星こぼす天の河原の寒さ哉
星絶えず飛んであら野の寒さかな（冬野のひろさ哉イ）
~~傾城のゆるり寐ねたる寒さ哉~~

国立国会図書館　タイトル『寒山落木 : 1-5』 請求記号 WB12-19　ガラス使用

野の中に一本杉の寒さかな

黒船の雪にもならで寒げなり

~~月落ちて入江ゝ寒舟一つ~~

物もなき神殿寒し太々鼓

新阪

足もとに寒し大きな月一つ

芭蕉翁像

佛でもなして焚かれぬ寒さかな

燃料になるべき佛さへもたねど

寒き日を土の[illegible]達磨に向ひける

亡友の墓にまうでゝ

目の前に顔のちらつく寒さかな

三河鳴村

名處は冬菜の肥ゆる寒さかな

冬ざれ

冬ざれを人住みかねて明屋敷

冬ざれて何の香もなし野雪隠

冬ざれて立臼許り門乃内

冬ざれや稲荷の茶屋の油揚

冬ざれて火焔つめたき不動かな

ガラス使用

~~冬枯や石燈籠の苔の[illegible]~~

佐倉

常盤木や冬されまさる城の跡　○

## 凍

○ともし行く灯や凍らんと禰宜が袖　○

## 冬日

冬の日の刈田のはてに暮れんとす

冬の日の暮れんとすなり八ッ下り

## 師走

高麗船の寶積みたる師走かな

~~やぜ[illegible]人見たる師走かな~~

大寺の静まりかへる師走かな

大幅の達磨かけたる師走かな

塵まじる錢さへ京の師走かな

海廣し師走の町を出はなれて

大筆にこする師走の日記かな

霙にもならで師走の大雨かな　○

~~田中を行くや師走の大男~~

大聲にさわぐ師走の鴉かな

師走晦日錢隕つること雨の如し

顔の如くらう一たる跡の大梅の図に

淋しさをにらみあふたる師走かな ○

### 歳暮

追風吹かば何處迄行くぞ年の船

行く年の行きどまりあり袋町

行く年の暖簾染むる小家かな

白梅の黄色に咲くや年の内

行く年のたゞあてもなく船出うる

草枕今年は伊勢に暮れにけり

馬に乗る婿入見たり年の暮

行く年に追ひつかれけり跛馬

行く年の大河滔々と流れけり

行く年や石にくひつく牡蠣の殻

### 除夜

大極にものあり除夜の不二の山

### 冬時候雑

嶋原や笛も太鼓も冬の音

青々と冬を根岸の一つ松

○下総や冬あたゝかに麥畠　碧○

見下すや冬の日向の十箇村

神の留守　ちゝめくや神のお留守の鳩雀
うつせみの羽衣の宮や神の留守

神迎　乗掛の旅僧見たり神迎

御命講　風も負けて大鼓の木魂かな

新嘗祭　籾よりの新嘗祭を知らぬかな

吹革祭　餅ぬくき蜜柑つめたき祭りかな

亥子　雪空の雪にもならで亥子かな

酉市　畦道や月も上りて大熊手
時雨にもあいず三度の酉の市
世の中も淋しくなりぬ三の酉

冬至　笠低く裏に日のさす冬至かな

炉開　爐開いて僧呼び入るゝ遊女かな
爐開きや炭も櫻の歸り花

火燵　○巨燵して語れ真田が冬の陣　碧　○
夜の雨晝の嵐や置巨燵
○いまさから便とゞきし巨燵かな　碧　○
悼
人足らぬ巨燵を見ても涙かな

芭蕉翁像に對す
○われは巨燵君は行脚の姿かな

火桶　拜領の錦張りたる火桶かな
○繪屏風の倒れかゝりし火桶かな　碧　○

炭竈　火の絶えし小野の炭竈小夜嵐

冬搆　庵破れて冬搆へすべくあらぬかな
藁垣の菜畑めぐるや一冬搆　碧

国立国会図書館　タイトル『寒山落木 : 1-5』 請求記号 WB12-19　ガラス使用

蓑掛けて冬に構へたり一つ家

冬籠

冬ごもり瀬男ばかりの庵かな

砂村や狐も鳴かず冬籠り

裏藪の竹盗まれし冬籠り

○筆まはる琴のそら音や冬籠り

松すねて門鎖せり人冬籠る

恋せじと冬籠り居れば蜘の糸

三味線や里ゆたかなる冬籠

○一村は留守のやうなり冬籠

---

一村は冬こもりたるけしきかな

（肴屋に百屋に遠し冬籠 [illegible]）
~~豆腐屋に八百屋に遠し冬籠~~

一村は青菜つくりて冬籠　碧 つ ○

清国捕虜厳舎

かゆといふ名を覚えたか冬籠

麦蒔

名處の麦蒔くまでに古り侍り

~~顔見世~~

~~顔見世や[illegible]~~

ガラス使用

鉢敲　○夜嵐の千本通り鉢敲き

夜興引　有明やかけ橋戻る夜興引

藥喰　藥喰す人の心の老いゐけり　碧

納豆　山僧や経読み罷めて納豆打つ

納豆汁腹あたゝかに風寒し

風呂吹　大きなるをこそ風呂吹と申すらめ

蕎麦湯　信州より蕎麦粉を贈られて

信州の寒さを思ふ蕎麦湯ゝ

紙衣　猿引の紙衣裂かるゝ猿の爪に

紙衣着て藪陰戻る月夜かな

蒲團　ものゝ香のゆかしや旅の薄蒲團

嚔　水鼻に旅順を語る老女かな

ガラス使用

大根引

（小室節の起りしところと聞くに）

大根引く歌こそあらめ三河嶋

大根干○

日暮や大根掛けたる格子窓　根岸を出て

子を負ふて大根干し居る女かな

切干の大根の中の唐辛子

年の市

押さるゝや年の市人小夜嵐

徴発の馬つゞきけり年の市

古暦

何となく奈良なつかしや古暦

あつめ来て紙衣に縫はん古暦

古暦花も紅葉も枕紙

節季候

節季候の節季候を呼ぶ明家かな

~~松[illegible]~~

~~君が代や松も[illegible]二十年~~

~~年忘~~

~~太耳の猶[illegible]や年忘~~

~~焼藷　わびしさや焼いもの皮~~

## 時雨

しくるゝや何を湯出鱆色に出る
しくれしか裏の竹山朝月さす
しくるゝや岬をめぐる船の笛
しくるゝや雞頭黒く菊白し
しくれつゝ豆腐買ひけり晴れるけり
菎蒻にしぐれ初めけり旅の中
夕日照る時雨の森の銀杏かな
山里や嫁入しぐるゝ馬の上
山の端や月にしぐるゝ須磨の浦
掛稲にしくるゝ山の小村かな
帆柱に月持ちながら時雨かな
竹藪を出れば嵯峨あり夕時雨
曙をしくれて居るや安房の山
金杉や相合傘の初時雨
十月や十日も過ぎて初時雨
幾時雨石山の~~[illegible]~~石に苔もなし

堀内

手拭の妙法講をしくれけり

山崎や時雨の月の朝朗

従軍中の飄亭を憶ふ

此頃ハどこの時雨に泣いて居る

乾外生追悼法会

なき人のおことを今日にしぐれけり

# 凩

凩や木もなき山の堂一つ

~~凩や芝のほさきの走り舟~~

凩や晝ハ淋しき廓道

凩や海ハ虚空にひろがりて

凩や葎を楯に家鴨二羽　○

凩や木立の奥の不二乃山

凩や道哲の鉦打ちしきる

凩や鐘撞く法師五六人

凩や落書兀げる仁王門　~~碧~~

凩に叫吼の獅子乃構へかな

凩に大佛暮るゝ上野かな

凩の中より月の升りけり

凩ののぞくがらすや室の花

凩の明家を猫のより處

~~凩の木の間〳〵や二十場~~

~~醜十棒~~

~~凩に吹かれて寒き鰻の面~~

東京

凩によく聞けた千々の響きかな

中野逍遥を悼む

凩がいやとは餘り無分別

草庵

凩の上野に近きいほりかな

すわ夜汽車凩山へ吹き返し

人去てあと凩の上野かな

淺草

凩に大提灯の靜かさよ

碧梧桐虚子京に来る

凩に吹かれて来たか二人連

# 霜

饅頭の湯氣のいきりや霜の朝

鵯の朝日に飛ぶや霜の原

帆ばしらに冨士高し朝の霜かすむ

麦の芽のほのかに青し霜の朝

熱帯の草しほれけり今朝の霜

○ほつかりと日のあたりけり霜の塔　珀石○

旭のさすや紅うぶ霜の不尽

猪のかき崩しけり霜乃岨

兵営や霜に荒れたる鴻の臺

蓬生や霜に崩るゝ古築地

塩濱の霜かきならす朝日かな

いたいけな霜置く薔薇の莟かな

痩菊に霜置かぬ朝の曇りかな

南天をこぼさぬ霜の静かさよ

~~朝霜や工[illegible]えし[illegible]の[illegible]~~

朝霜や静かに残る竹の月

朝霜の帆綱に光る月の出かな

朝霜やかれし赤き蕣の花

○初霜や束ねよせたる菊の花

霜の夜や赤子に似たる猫の聲

朝霜や舟流したる橋の下

~~朝霜や栗流る[illegible]屋根~~

朝霜の御茶の水河岸静かなり

船橋驛

朝霜やいらかにつゞく安房の海

### 霜柱

籾敷くや踏めば落ち込む霜柱
隠れ家や未下りの霜柱

### 霰

賣れ残る炭をおろせば霰かな
呉竹の横町狭き霰かな
竹買ふて裏河岸戻る霰かな
○板塀によりかゝられぬ霰かな
星暗く霰ふるなり小野木笠
降る程の霰隠れて小石原
○甲板に霰の音の暗さかな ◎

### 霙

○大船の楷子をあげる霙かな ◎

### 雪

夜の雪杉の木の間の伽藍哉
初雪の下に火を焚く小舟ある
~~初雪や雀あそぶ手水鉢~~
初雪に祇園清水あらはれぬ
~~初雪や伊豫の松山十八里~~

ガラス使用

~~初雪や百万石の城の跡~~

○初雪や海を隔てゝ何處の山

~~碧~~

~~初雪の流れて青し朝日川~~

~~初雪の寺霰にぬ大江山~~

初雪の中を淀川流れけり

雪の跡人別れしと見ゆるかな

~~中の雪十五重の塔の佛かな~~

雪や来ん衛士の篝火影さわぐ

有明の雪の清水灯残れり

鐘撞いて雪になりけり三井の雲

~~舟や何処の初雪載せて来る~~

紙漉や初雪ちらり〳〵降る

一村は雪にうもれて煙一のれ

筑波嶺の雪にかゞやく朝日かな

~~日あたりや雀の崩す檐の雪~~

新庭やはつちり高き雪の笹

巌鳴

海の上に初雪白し　大鳥居

奈良

初雪やあちらこちらの寺の屋根

国立国会図書館　タイトル『寒山落木 : 1-5』 請求記号 WB12-19　ガラス使用

~~德満~~

~~初雪の土堤に[illegible]~~

~~横濱~~

~~初雪や異人ばかりの靴の跡~~

東京

見渡せバ初雪つもる四里四方　（郊外眺望）

上州の山に雪見るあしたかな

初冬の月裏門にかゝりけり

鶯の凍へ死ぬらん冬の月

うしろからひそかに出たり冬の月

## 冬月

寒月や細殿荒れて猫の聲

~~水門に鼬死居る冬の月~~

## 冬川

よるべなき冬の野川の小魚かな

冬川や菜屑流るゝ村はづれ　~~碧~~

冬川に捨てたる犬の屍かな　○

○冬川の菜屑啄む家鴨かな　○　○

大石のころがる冬の河原かな

~~冬川に塞がる程の苫船~~

冬川や砂にひつゝく水車

### 冬田

つら〳〵と雁並びたる冬田かな

稗蒔に案山子の残る冬田かな

長〳〵と冬田に低し雁の列

吉原の廓見えたる冬田かな

蜜柑剥いて皮を投げ込む冬田かな

身を投げて蚤死なんとす冬田かな

### 枯野

商人の敵地にはいる枯野かな

旅人の咄しして行く枯野かな

その果に小松の並ぶ枯野かな

ところ〴〵菜畑青き枯野かな

伸び上れバ海原見ゆる枯野かな

流連道の此頃出来し枯野かな

都出て枯野へ上る渡しかな

~~蟻程に枯野の家の並びかな~~

日のさすや枯野のはての本願寺

野ハ枯れて隣の国の山遠し

野ハ枯れて杉二三本のやしろかな
學校の旗竿高き冬野かな

### 冬山

冬山やごほごほと汽車の麓行く
~~あちら向く峯や冬の山一つ~~

### 氷

古沼の水田できに氷かな
不忍に朝日かゝやく氷かな
聞き送る君が下駄遠き氷かな
大船や動けばわれる薄氷

檐下や金魚の池の薄氷
○染汁の紫氷る小溝かな
~~さ波や氷らぬ鴨の湖青し~~
果も見えぬ氷を走る礫かな
竹棹や妹が掛けたる氷面鏡

碧石

### 千鳥

~~軍艦の沈みしあとや群千鳥~~
~~難船のあとを弔ふ千鳥かな~~

上げ汐の千住を越ゆる千鳥かな

鴨

夜更けたり何にさわだつ鴨の聲
灯ちらし鴨鳴く家のうしろかな

水鳥

水鳥や中に一すぢ船の道

鴛鴦

薄氷を踏むをし鳥の思ひうれ
○古池のをしに雪降る夕うれ 碧○
古池に亡き妻や思ふ鴛一羽
積もりあへず思ひ羽振ふ雪の鴛
をし鳥や嵐に吹かれ月に流れ

鷹

ましらふの鷹据ゑて行くあら野かな
○はし鷹の拳たなれぬ嵐かな 碧○

梟

梟の思ひかけずよ枯木立
○梟をなぶるや寺の晝狐

鯨

鯨よる大海原の静かさよ

**鰒**

来年の事言へば鰒が笑ひけり

**海鼠**

風もなし海鼠日和の薄曇り ○
引汐の錨にかゝる海鼠かな
天地を我が産み顔の海鼠かな

**牡蠣**

大船の蠣すり落す干潟かな
妹がりや荒れし垣根の蠣の壳

**冬蠅**

日あたりや障子に羽打つ冬の蝿
古筆や墨嘗めに来る冬の蝿

**落葉**

○御手の上に落葉たまりぬ立佛
○捨舟の落葉掃き出す日和かな
○吹きたまる落葉や町の行き止まり
○首入れて落葉をかぶる家鴨かな
山の井の魚浅く落葉沈みけり

碧○

裏口や落葉掃き込む大竈
夕風や木の葉吹き寄する石畳
~~谷川やいつの落葉の木の葉石~~
大村の鎮守淋しき落葉かれ
今日もまた一斗許りの落葉かれ
細き道のしきりに曲る落葉かれ
散るを掃き掃くを燃やして木葉哉
捨て置く箒埋めて落葉かな
延寶の立石見ゆる落葉かな
尼寺の佛壇浅き落葉かな
晝中の小村淋しき落葉かな
街道の馬糞にまじる落葉かな
ほそ〳〵と烟立つ茶屋の落葉かな
雞の垣を出て來る落葉かな
蛛の囲に落ちて久しき木の葉かな
飛ぶが中に蔦の落葉の大きさよ
落葉してむつかしげなる枳殻かな
落葉焚いて人無き寺の日和かな
木の葉散る奥ハ日和の天王寺
○木の葉はら〳〵幼子に逢ふ小阪かな

落葉焚く烟の細し卵塔場

池上
山行けバ御堂〳〵の落葉かな

## 紅葉散

杉暗く紅葉散るなり御幸橋

蓮枯れて泥に散りこむ紅葉かな

一葉二葉紅葉散り残る梢かな

## 冬木立

棒杭や四ッ街道の冬木立

日暮里や只植木屋の冬木立

大雨のざんざとふるや冬木立

菜を掛けし家こそ見ゆれ冬木立

見れバ晝の月かゝりけり冬木立

其奥に富士見ゆるなり冬木立

昔寵愛の女住みけり冬木立

銃提げし士官に逢ひぬ冬木立

ところ〴〵烟突高し冬木立

~~川や帆柱並ぶ冬木立~~

冬木立五重の塔の聳えけり

冬木立千住の橋の見ゆるなり

ガラス使用

冬木立道灌山の鳥居うれし
麓

~~村もなし只冬木立まばらなり~~

小鳥さへ啼かず冬木立静かなり

三河嶋

○菜畑や小村をめぐる冬木立　碧石○

根岸

誰様の御下屋敷ぞ冬木立

砂村

奉納の白き幟や冬木立

待乳山

町中に聖天高し冬木立

郊外

鳥帰る冬の林の塔暮れたり

枯柳

嶋原の入口淋し枯柳

~~古城やいよいよあはれの枯柳~~

柳枯れぬ菜畠めぐる藁の垣

○古池や柳枯れて鴨石に在り　碧石○

枯木

○一もとの榎枯れたり六地蔵　○

無花果の鈍な枯れ様したりけり

水落ちて橋高し枯木二三本

歸花

川崎や畠は梨の歸り花、

茶花

からたちの中に茶の花あはれなり

○茶の花や庭にもあらず野にもあらず　碧石　○

茶の花や坊主頭の五つ六つ

山茶花

○山茶花に犬の子眠る日向哉　碧　○

山茶花に戀ならで病める女あり

山茶花や墓をとりまくかなめ垣

山茶花に猶なまめくや頽れ門

山茶花に鉦鳴らす庵の尼か僧か

寒椿

寒椿今年は咲かぬやうすなり

根岸

新らしき家のふえけり寒椿

枇杷花

さはふき雲さへ持たず枇杷の花

ガラス使用

枯尾花　砂村や茶屋のかたへの枯尾花
川狭く板橋高し枯尾花
枯尾花焼場へ曲る小道かな

枯蘆　枯蘆の折れも尽さす捨小舟
枯蘆につゞく千住の木立かな
片岸の蘆こと〴〵く枯れにけり
枯蘆や同じ處に捨小舟

枯荻　○枯荻や日和定まる伊良古崎　碧石○

枯蓼　蓼枯れて隠れあへず魚逃げて行、

枯蔦　枯蔦のしがみついたる山巌かな

枯菊　傘さして菊の枯れたる日和かな

枯蓮　枯蓮柩見え来る野道かな

### 冬枯

冬枯に飯粒ひろふ雀かな
冬枯の野末につゞく白帆かな
冬枯の荒れて菊未だ衰へず
冬枯の中に小松の山一つ
冬枯や遥かに見ゆる真間の寺
冬枯や礎見えて犬乃糞
~~冬枯や何山彼山富士の山~~
冬枯や張物見ゆる裏田圃
戀ふうときし身ハ冬枯るゝ許りなり
○道灌の山吹の里も冬枯れぬ

十二月九日祝捷大會
冬枯の山ハうつくしき物許り

新嘗祭
冬枯の根岸淋しや日の御旗

妙法寺
冬枯や手拭動く堀の内

達磨賛
冬枯のたぐいみもあらず眼の光り

### 霜枯

霜枯や僅かに高き誰の塚

国立国会図書館　タイトル『寒山落木 : 1-5』 請求記号 WB12-19　ガラス使用

霜枯や誰がたくつきの姫小松

霜枯や階子懸けたる明屋敷

○霜枯の佐倉見あぐる野道かな

## 草枯

いさゝかの草枯れ尽す土橋かな

道の邊や~~[illegible]枯れし[illegible]の案~~枸杞の実赤き枯葎

草枯や寺の名殘の井戸一つ

水草の枯るゝみ枯れぬみ水の中

なか〳〵に枯れも尽さぬ畦の草

## 寒菊

寒菊や大工ハ左甚五郎

寒菊や村あたゝかき南受

寒菊に爪剪る椽の日さしかな

## 水仙

蛸壷に水仙を活けたはせたり

芋の跡水仙植ゑてまばらなり

碧

薄氷の中に水仙咲きにけり

水仙に今様の男住めりけり

水仙や朝日のあたる庭の隅

八手花　八手咲いて茶坐敷とも見ゆるかな

冬菜　棒入れて冬菜を洗ふ男かな

桶踏んで冬菜を洗ふ女かな

葱　山里や木立を負ふて葱畠 ○

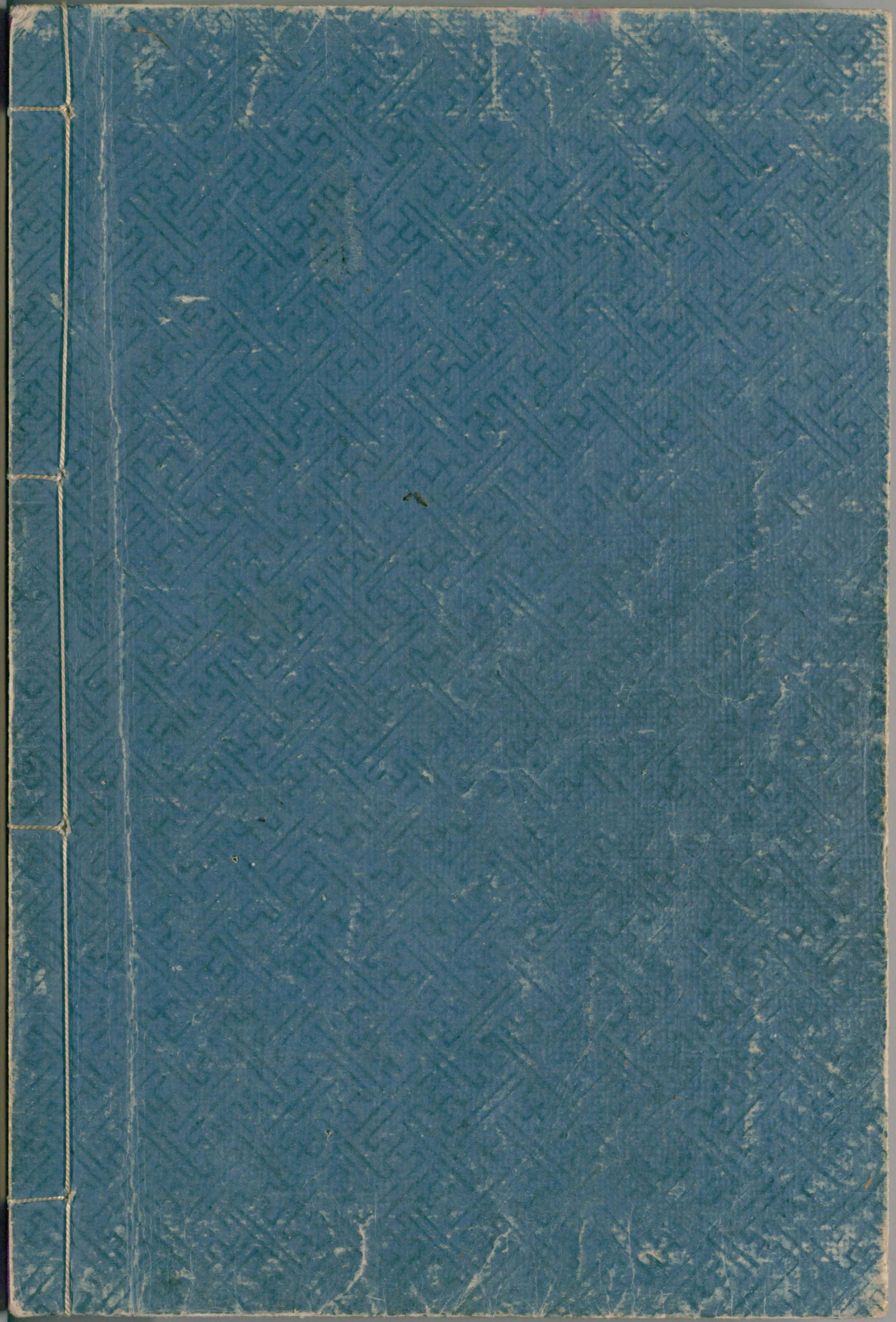
霜月のうら枯れんとす葱畠

ガラス使用

91

国立国会
26.7.31
図書館

ガラス使用



ガラス使用